

日本建築空間体感装置

---かみと人をめぐる風景を媒介にした空間変容結晶体---

1150005 石上 智貴

指導教員：渡辺 菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

主要語：日本の建築空間、信仰、庭園史、神秘光線軸^{レイライン}

1. 背景と目的

「日本建築」という言葉を聞き、美しく彩られた寺社仏閣や城郭の外観を思い浮かべる人は多くいるだろう。一方で、そういった建築の空間構成全体に意識が向けられることは少ないように思われる。歴史の流れの中で、様々な要因から幾度も変容を重ねてきた空間構成は、建築そのものの本質、あるいは当時の人々の価値観や思想が鮮明に刻印された歴史の代弁者であると言える。

現代の日本において、そういった歴史観に由来する建築はほとんど無い。その反面、由来無く抽象度の高い建築が多く見られ、それらが歴史に影響を受けていない自由度の高い新鮮な建築として、他国に評価されている一面がある。

しかし、こういった現代の日本建築がこれまでの歴史とこれからの歴史の間に入り、歴史の1つとなるには、日本独自の固有性、思想性が希薄であるように思われる。今こそ、歴史の代弁者の声に耳を傾け、これからの日本建築のあり方を再確認するときではないか。

そこで、この対話の媒介となりうる装置を提案したい。冒頭で述べたように、日本の建築における空間構成は古代から現代に至るまでにさまざまな変遷をたどってきた。この変遷を体感することの出来る空間を、古代から近世に渡る「内部空間と外部空間の双方の関係性」、「人とかみさまの距離」の変化に着目し構築する。

2. 考察、設計の方針

2-1. 空間歴史の捉え方

まず、歴史は出来事の断片を人の解釈によってつなぎ合わせたものであり、資料となる文書や記録の充実化が進むにつれ変化していくものである。そこで、時間経過と共に姿を変える現状普遍的な歴史観に目を向けるのではなく、自身が魅力的と

感じた一冊の本の歴史観を主軸として考察、設計を行った。

2-2. 参考文献

日本建築の空間の変遷を把握するにあたり井上 充夫氏の『日本建築の空間』を参考図書とした。

さらに、上記図書からの考察に加え、庭園史から当時の人々の思想を読み解こうと考えた。2項からの内容はこの双方の性質を元に述べている。

3. 歴史に見る日本の建築空間

日本建築の空間の歴史を大分すると以下の5つに分けることが出来る。

3-1 空間よりも実体

原始時代から飛鳥時代あたりまでの古代の人々は、柱や巨石等の実体に対する素朴な信仰心を有していた。当時の人にとってかみさまは親密な存在であった。

3-2 彫塑的構成

主体の占有空間として造形されており、人の出入りを想定しておらず、強固な対称性を有している。庭園としては須弥山の像があり、これは仏教世界の宇宙を示した物で、宇宙への関心が確認できる。

3-3 絵画的構成

人が礼拝、儀式をするための中庭が生まれ、建物には強い正面性が生まれる。庭園は平等院鳳凰堂等にみられる建物正面に池を配するものがあり、見ることが出来るが触れることの出来ない浄土思想における第二の理想的な世界を表現する役割を担っている。

3-4 内部空間の発展

内部空間が明瞭に意識され始める。人とかみさまの距離が内部空間内において幾度も変化している。

庭園は内部空間とは別な物として作られた物が多い。

3-5 行動的空間

軸、極を有さない見通しの出来ない空間であり、人が移動することを前提にした空間となっている。庭園も同じ性質を有している。

4. 設計の^{フロー}順路

以下の順路に基づいて空間を構築する。

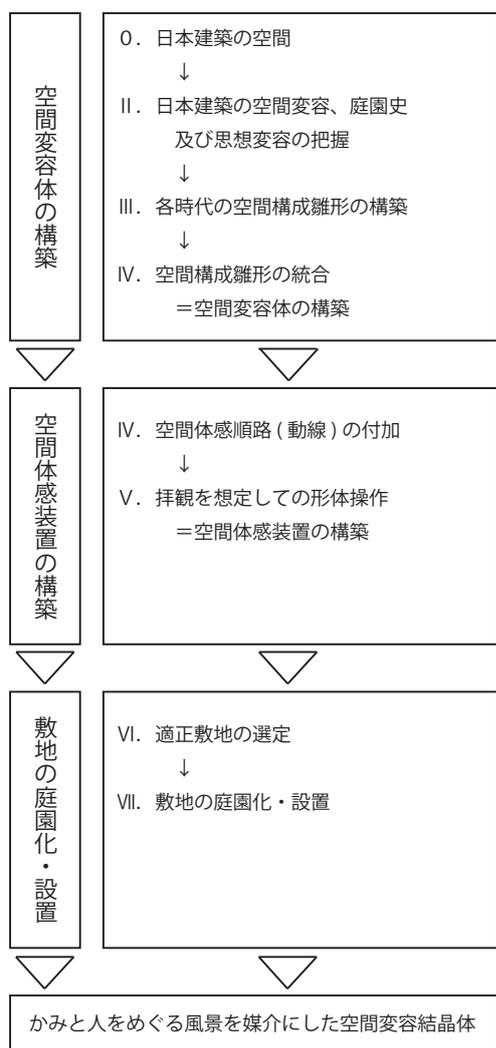


図.4 設計の順路図

5. 生み出される体感装置

I. 日本建築の空間変容及び思想変容の把握

参考図書を元に3項で示したような空間構成を把握し、人とかみさまの距離に着目しさらに11種に分割を行った。

II. 各時代の空間構成^{モデル}雛形の構築

それぞれの空間について参照元となる建築物から特性を読み解き、雛形化する。かみさまにあたる部分の寸法は、仏の身長であったとされており仏像の大きさの基準にもなっている1丈6尺を基準に決定する。空間そのものの寸法には1尺を単位として決定し、空間の高さや奥行き方向の比には参考元の建築の比を用いる。

時代によっては空間の雛形化にあたり庭園史の資料から思想を読み解く操作を行う。

この操作から以下のように空間雛形が構築された。

① 実体雛形

室中央に柱が立ち、天井が無い空間となる。ここは最上階となっており、ここにおいてようやく核の全貌を臨むことが出来る。

② 彫塑的構成雛形

東大寺塔院を元に、中央から主体、主体の占有空間、回廊、回廊の外となるように空間化されている。後に行う形体操作を利用し回廊内部には侵入できないようにされている。

③ 絵画的構成(興福寺式)雛形

興福寺の構成を元に侵入可能な中庭を有する空間となっている。

④ 絵画的構成(寺院式と神社式の比較)雛形

当時の浄土思想に基づいた儂い第二の理想的世界を表現するために、奥の壁を除き、杵に象られた空を望む空間となっている。

また、門を基準にした時にちょうど逆さの関係となっている寺院式と神社式の形式の差を体感するため、同じ室の出入り口の位置を変更した2つの空間を並べた。

⑤ 内部空間の発展(庇の出)雛形

庇によってかみさまの空間が延長される状態を示す空間となっている。

⑥ 内部空間の発展(内陣と外陣)雛形

かみさまのための空間と人のための空間がひとつに合わさり、複合内部空間となった状態を示す空間となっている。参考とした当麻寺本堂においては、かみさまの空間と人の空間は面積的に対等な状態であった。

⑦ 内部空間の発展(厨子の発生)雛形

かみさまが厨子と呼ばれる格納庫シエルターに納められた状態を示す空間となっている。厨子は、自らの空間に侵入してきた人間に押し込められ、かみさまが逃げ込んだ最後の場所といえる。

⑧ 内部空間の発展(脇壇の発生)雛形

部屋の奥に脇壇が設けられそこに神さまが後退したことを示す空間となっている。この当時、内部空間が外部空間におかまいなしに自律的に発展する傾向があった。この性質に従い、かみさまの空間が脇壇として建物奥に発生した。信仰の対象が堂外に追い出され、「かみのための空間」が「人のための空間」に変質した。

⑨ 内部空間の発展(奥行き方向への後退)雛形

かみさまが空間の奥に後退した状態を示す空間となっている。参考とした本願寺本堂内部には左右に縦方向に並ぶ四本の列柱がある。これは、奥方向への動きを暗示するものであった。

⑩ 行動的空間雛形

移動を想定した空間とし、かみさまの存在が曖昧になった空間であるため、その存在を具体的に体感できない空間となっている。

Ⅲ. 空間構成雛形の統合

かみさまを軸として雛形を高さ方向に配列する。これを本設計において核と呼ぶ。近世が最下層になっており、時代を遡る形で観覧を行うことになる。

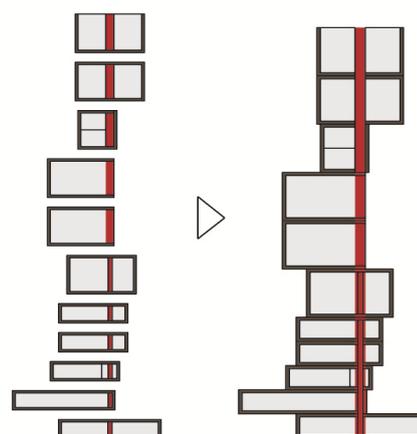


図 5-1.空間構成雛形の統合図式

Ⅳ. 空間体感順路(動線)の付加

核を覆う形で時間の流れを表現する動線を配する。これは、各室の床面の外接円を基準に作り出す。形体はうねりのある筒型となる。

核での空間体験と時間軸の移動を明確に隔てるために、動線部と核は直角に折れる導入空間アプローチによって連結されている。

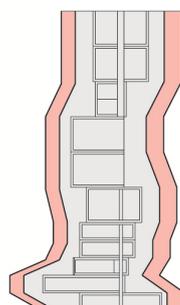


図.5-2 動線空間図



図.5-3 導入空間構成図

Ⅴ. 拝観を想定しての形体操作

Ⅳまでの操作によって生み出される空間装置は90m近くの高さを有しており、拝観者の移動高さを考慮しての変換が必要である。そこで、入口側を人の出入り可能な高さに圧縮する操作を行い、人の高さ方向の移動を半分程度とした。この際、各室の平面図に変化は起こらないようにする。また、上階に進むにつれ徐々に床面の勾配が急になり、体感する空間の単調さを打ち消す効果も生んでいる。

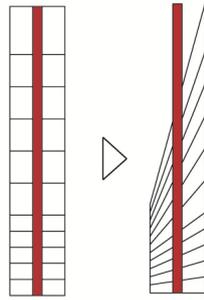


図.5-4 形体操作図式

VI. 適正敷地の選定

階級の高い寺社仏閣、あるいは霊山の配置を結ぶと、神秘光線軸と呼ばれる直線、または幾何学的図形となる。もっとも古代的な庭園と呼ぶことのできるこれらの図形と密接な関わりを持つ神社の1つに岩上神社がある。この岩上神社があり、国生み神話の起点ともなっている淡路島に選定敷地を設けた。



図.5-5 岩上神社を基準とした神秘光線軸図

VII. 敷地の庭園化・設置

空間装置は空間の歴史を体感できる神秘的な場所と位置付け、日常の風景から隔離された場所に設置しようと考えた。そこで、淡路島南西にある山に挟まれた谷部分に、空間装置の性質を活かすための庭園化(地盤形成)を施す。この敷地を1つの庭園として成立させるため、敷地選定の際に取り扱った神秘光線軸との関連性をこの過程でも意識している。手順は以下の通りである。



図.5-6 敷地構成図

- ① 谷となっている敷地のさらに奥地に真円に従い、すり鉢状の穴を形成する。この内部が設置場所となる。
- ② ①の空間へ侵入するための動線を岩上神社に向う軸線に従い必要最低限の掘削で作り出す。神秘光線軸との関係性が強い岩上神社に対して軸線を持つことで、ただの谷がより強い信仰圏との繋がり、古代性を帯びる。
- ③ 外の景色を拝観対象とした絵画的構成雛形のために、必要な切れ込みを室の床の角度(約 30°)に合わせ入れる。
- ④ 岩上神社に向う軸線を構成軸として空間装置を設置する。

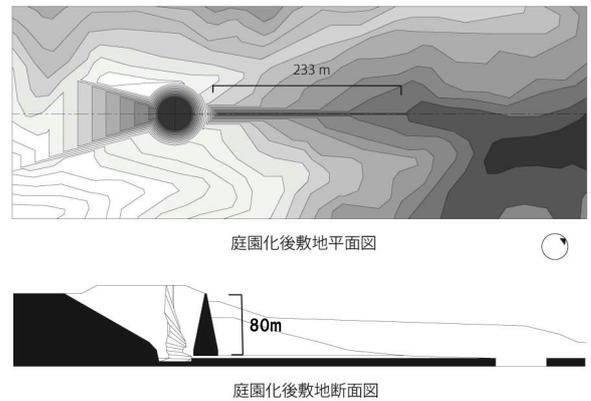


図.5-6 庭園化後敷地図

6. まとめ

日本建築における歴史の考察と簡潔な形体操作によって、空間構成の変遷、各時代の人々の思想を示す唯一無二の空間装置が生まれた。

我々は新しいものを生み出す時に過去から学び取り活用する権利を持っている。その行為が、引き継ぐべき思想や価値を内包する建築を生み出すことにつながるのだと、この設計を基に発信していきたい。この建築が未来の空間雛形となり、それが、新しい日本建築空間を創発していくことに期待したい。